

島を越えた “結まーる”

(有)エコ・ファーム石垣島 代表取締役

崎枝 純夫さん (43歳)

〒907-0023
沖縄県石垣市字石垣416-20



【プロフィール】18歳から10年間、島を離れていたが、28歳で帰郷。島に出来た大型観光ホテルでの食材担当者を経て、34歳で就農。菊栽培を始めるが、37歳からは農協の理事として活躍。平成10年8月、川東知宏さん(39歳)らとともに、エコ・ファーム石垣島を設立。その代表者となる。

旧暦の正月十六日、沖縄県石垣市(石垣島)では多くの商店や会社が「本日休業」の張り紙を出して店を閉めてしまう。市役所や大きな会社でも、従業員が休みを取るため午後は開店休業の状態となる。沖縄県の離島に伝わる「十六日祭」というお墓参りの日なのである。今年は二月三日がその日だった。

正月の料理とお酒を墓前に供え家族全員で先祖を祭るのである。離島から那覇の琉球王朝に徵用されて親の死に目に立ち会えなかつた若者が、旧暦の正月十六日に墓前で亡き親と一緒に先祖を祭る正月の宴をしたというのがそのいわせだそうだ。高齢者を座の中心にして家族全員が墓前に集い、また、親戚の墓を互いに訪ね合うのだ。家族や地縁の絆を確認するかのように。

独自の民族文化や歴史を持ち、伝統的な習俗や生活観、家族や共同体の結びつきが現在の暮らしの中に根強く残っている沖縄。琉球王朝の日本国への併合に始まり、沖縄戦、敗戦後の米国統治と日本復帰、米軍基地の存在とそれへの経済的依存など、同じ日本人であっても、沖縄の人々は他府県とはまったく異なる歴史の体験を持つ人々なのである。

誰でも高校野球が始まると「県」や「旧藩」単位に区切られた県民感情によつて、精神が高揚している自分に気付く

くはずだ。しかし、沖縄の人々の場合には、他府県人とは比較にならぬほどに強い求心力を持つ沖縄県民共通の心性が存在している。そして、そこにはウチナンチュ(沖縄人)に対するヤマトンチュー(大和人・日本人)という対立の図式と不信感を背景にした割り切り難い感情も含まれている。

そんな異質の歴史を背負う二人の人物の出会いが、沖縄県石垣市(石垣島)に、今、新しい時代の波を起している。崎枝純夫さん(43歳)宅の今年の十六日祭には、一人だけ座を囲む人々とは顔付きの違う人物が同席していた。大阪出身の川東知宏さん(39歳)だ。六日祭には、一人だけ座を囲む人々とは顔付きの違う人物が同席していた。大坂出身の川東知宏さん(39歳)だ。

崎枝純夫さんを代表者として設立された(有)エコ・ファーム・石垣島で崎枝さんのパートナーとして働く人である。

これまで二人は、それぞれの場所で生き方探しの旅を続けてきた。崎枝さんは島に対して自らの果たすべき責務を問いつけて、様々な仕事や各地での暮らしを経験した後、若くして地域のリーダーになつていった。大阪生まれの川東さんは優れたプランナーとして企業や自治体のコンサルタントとしての実績を持ちつつ、石垣島での農業に夢を見続けて来た。

そんな一人が、異質の才能と経験を互いに認めるの中からエコ・ファームの事業構想は創り出されて行つた。

エコ・ファームの事業構想

沖縄には「結まーる」という言葉がある。内地でいう「ゆい」のことだ。その言葉の中には単に作業の共同だけではなく、心のつながりや関係性そのものを表す意味が含まれているようだ。二人、そしてエコ・ファームの仲間の間には、それこそ「島を超えた結まる」が成立しているようだ。



崎枝さん宅の十六祭の宴には大阪出身の川東さんの姿が見えた。沖縄の墓の形式はこんなお祭りを開く事を想定した大きな墓が多い

垣島が設立されたのは、98年8月。崎枝さんを代表者に川東さんを含む五人の出資で設立された。その設立には、參加した人々だけでなく、農家、市役所、製糖会社などで働く島の農業の改革を目指す人々の夢と想いが凝縮されている。

彼らが目論む事業は、府県への生産物の出荷だけでなく、物理的距離からすれば府県よりもはるかに近い経済圏である台湾やアジア諸国

市場に向けて発信する石垣島農業を目指しているのだ。農業生産だけではない。流通、加工、資材販売、観光までを視野に入れ、他の離島ともネットワークを組んだ沖縄農業の自立を目指す「夢」の事業なのである。

設立後一年も経たないエコ・ファームの事業実績は、まだ、リースで借りている90坪三棟の温室でのピーマンの生産・販売がやっと始まつたに過ぎない。また、資材の販売も定款の中に含む同社では、港渡しの形で農家に安く

肥料を販売し、土日だけで2000袋も売り切るといったこともしている。

農協に独占されている肥料の販売に殴り込みをかけるだけではない。元農協の専従理事であつた崎枝さんが、バスを小さいながらもエコファームが演じて見せることで、島の農業に変化をもたらそうとしているのだ。

彼らの構想は、まずは信頼の出来る取引先と幾つかの作物について、契約栽培で足場を固めようとしている。最低3つくらいの契約物が必要だろう。すでに、数社の契約先と幾つかの作物の実験的栽培が始まっている。

オリジナルの産物と加工品生産もしていきたい。農産物を「商品」として企画開発し、自社販売と共に流通や観

光業と組んだ販売展開を行う。商品企画力とマーケティングの能力さえあれば、観光地である石垣島の条件、亜熱帯の気候がプラスに働くのだ。

反収を上げなければ収益は上がらない。品質の高さも当然だ。それらを実現するために、点滴によるファーティゲーションなど最新の技術を導入しつつ高収量、高品質を可能にする栽培技術を確立していく。温室での園芸作物の高度化だけでなく、サトウキビの側枝苗移植と点滴灌水を組み合わせて地域の作物であるサトウキビ畑の間作として野菜類を導入するといった具合に。

石垣島に限らず、沖縄の島々には、離島ゆえの補助が与えられてきたために農業生産基盤において様々な条件が整っている。まだ、ファーティゲーション



「商品」作りのために様々な栽培試験に取り組む川東さん



側枝苗の育苗技術が研究されており点滴灌水と共に注目されている

ヨンという技術レベルには達していないが、畑地においてもそれが定着し得る条件が他府県以上に進んでいるのが沖縄だ。沖縄という風土に適合させる技術の改良と技術知識が高められて行けば、ファーティゲーションは沖縄から進むとする言える条件があるのだ。

さらに、伝統的な手法でのサトウキビから黒糖を作る技術を観光目的と地域の新商品としたり、石垣の自然風土の魅力を売り物にしたグリーンツーリズムというより彼等なりのオリジナル「観光商品」を開発しようとも考えてい

る。

肥料や資材の販売にも取り組む目的は、単に安い資材を農家に売つてそれで利益を上げるということだけではない。自分たちが実践して成果を上げて見せて、有効な技術を意欲と知識とともに地域に新たな農業を定着させることを目指しているのだ。

さらに、崎枝さんたちは、技術を標準化しマーケティングチャンネルを整備して、沖縄の各離島の農業経営者たちと組んでフランチャイズのネットワークを組むことまで考えている。

異質な者の出会いと協力

崎枝さんと川東さんが始めて出会ったのは、崎枝さんが石垣市農協支所の

専従理事をしていた当時のことだ。川東さんは県のコンサルタントとして島に出入りしていた頃だった。

島の外での暮らしが長い崎枝さんでも、府県の人が持ちこむ商売の話題に對しては、反射的に不信感で身を固くする習慣が付いていた。その理由は文化の違いやビジネス感覚のズレから来ることが多いのだが、崎枝さん自身も「ヤマトンチューに騙された」と思う体験があった。

しかし、川東さんの人柄だけでなく、彼が語る事業提案や技術の話題、そし



やはり大阪出身の川東夫人、奈美子さんの協力もエコ・ファームの力の1つだ

島を超えた“結まる”
島を超えた“結まる”

異質な者同士の共同性とは、曖昧に馴れ合うことでは

て彼がその人脈で島に案内して来る大学の先生や企業の技術者たちの話しあは、川東さんに対する崎枝さんの信頼と共に島の外での暮らしが長い崎枝さんで

専従理事をしていた当時のことだ。川東さんは県のコンサルタントとして島に出入りしていた頃だった。

一方、石垣島での農業に夢を抱き続けながら、その糸口を掴みかねていた川東さんにとっても、崎枝さんとの出会いは幸運だった。彼もまた、崎枝さんとこれまでに出会ってきた農協や行政の人々、あるいは沖縄の農家一般とは違うセンスを感じていたのだった。

それだけでなく、川東さんには無い資質を持つ崎枝さんこそが自分にとっての最高のビジネスパートナーであると思うよりもなつていつた。

30代前半で農協理事に選ばれるような崎枝さんの人望と行動力、そして川東さんの企画力や情報力、そしてマーケティングセンスが結びついた

のだ。ウチナンチューとヤマトンチューが、違いを乗り越えて共同することが生みだすもの。それがエコ・ファームの力であり可能性なのだ。

一方に沖縄の人々が持つ固有な民族性や不幸な歴史の経験ゆえの被害意識がある。その反面で、府県の人にも過剰で屈折した加害者としての感情を引きずっている場合もある。そして、自分と異質な文化に対する鈍感さや無知ゆえの誤解もある。しかし、沖縄人のヤマトンチューに対する過剰な被害者意識が沖縄県あるいは沖縄の人々の自立を妨げているとは言えないのだろう。

ない。お互いが持つ屈折した感情から自由になり、むしろ違いを理解し、共通の未来を創ろうという意志の中から生まれてくるものなのだ。

また、沖縄の人が府県のビジネスマンに不信感を持つのと同様に、府県の商売人も沖縄との商売に二の足を踏んでいることを沖縄の人々は忘れるべきではない。

「ヤマトンチューが来て一度限りの商売をして逃げてしまう」というこれまで沖縄の人々が体験してきた苦い思い出も、彼らが狡かつただけではなく、契約の概念を含めて沖縄の側にも問題があつたとはいえないだろうか。

それがどのような理由であるにせよ、被害者意識を持つものと加害者としての後ろめたさを持つ者が、健全で信頼を土台にしたビジネスの関係を作り出すことなど出来るはずは無いのだ。そうでなければ長続きしないのだ。

一方に沖縄の人々が持つ固有な民族性や不幸な歴史の経験ゆえの被害意識がある。その反面で、府県の人にも過剰で屈折した加害者としての感情を引きずっている場合もある。そして、自分と異質な文化に対する鈍感さや無知ゆえの誤解もある。しかし、沖縄人のヤマトンチューに対する過剰な被害者意識が沖縄県あるいは沖縄の人々の自立を妨げているとは言えないのだろう。



ハウスをリースで借りて栽培委託をしている農場の人々と。右端が川東さん。左から2人目が崎枝さん

麻薬のように農業を、沖縄をそして離島を弱い存在にしてしまった。

つても、自分を必要とする者、お客様に選ばれる競争をしない。

今、世間で何が売れているかしか考えず、せいぜい俺なら幾らで作れるという競争しかできない。農業はそこにしかない風土の中で行われるからこそ可能性があるのだ。自分にしかないもので競争すべきなのだ。

エコ・ファームには川東さんという外部の人間がいるからこそ、その価値が見えるのだ。

どこにもいろんな人間がいる

ものだ。石垣島や沖縄をシャブツてやろうという府県の人間もいる

だろう。沖縄の人間とは組みたくないという者もいるかもしれない。でも、川東さんは違う。彼は石垣に魅

一割に過ぎない。それを悔しがるのでなく、それを自分たちで供給するだけでも石垣の農業には大変な市場があると考えるべきなのだ、と崎枝さんたちはいう。

大変な資源があるので、石垣島には、

さえた崎枝さんの選択こそが、エコファームの可能性と島の未来を切り開こうとしているのだ。

人は皆、自分自身や地域を見つめようとせず、自分の中にある可能性を見

ようとした。島を超えた結まる」を実現させた崎枝さんの選択こそが、エコファームの可能性と島の未来を切り開こうとしているのだ。

ダイアモンドの原石

石垣島には年間50万人の観光客が訪

れ、年間90億円位の金を使うという。しかし、石垣島の観光土産品のほとんどは本島などの外部から持ちこまれたものであり、島の中を作っているのは補佐する二人の組み合せが肝心なのだ。この二人の信頼に始まる事業の成功は、島を変えるきっかけになるのではないだろうか。よそ者である川東さんを迎えて入れ「島を超えた結まる」を実現させた崎枝さんの選択こそが、エコファームの可能性と島の未来を切り開こうとしているのだ。

大変な資源があるので、石垣島には、さえた崎枝さんの選択こそが、エコファームの可能性と島の未来を切り開こうとしているのだ。

復帰後の沖縄振興策としてもたら

されて来た様々な補助金は、沖縄の人々や農業を府県以上に保護への依

存体質を持つ足腰の弱いものにして

いる。離島という条件の悪さによつて「保護」を与えられ、やがてその「保護」という利権にしがみ付く体质

を生み出してきた。そして、それが

とても、自分を必要とする者、お客様に選ばれる競争をしない。

今、世間で何が売れているかしか考えず、せいぜい俺なら幾らで作れるという競争しかできない。農業はそこにしかない風土の中で行わるからこそ可能性があるのだ。自分にしかないもので競争すべきなのだ。

農業を、沖縄をそして離島を弱い存在にしてしまった。農協や行政は、補助金を得ることには熱心であつたとしても、それに経営としての命やソフトを持ちこむことはできない。それは現実の経営者によつてしかできないのだ。そして、崎枝さんや川東さんのような経営者たちが、その経営の実践の成果を見ることによつてしか、農業を補助金体質から抜け出させることは出来ないので。

彼らが地域に未来を提示して見せ、どんどん自分の成果を地域の人々に分け与えて行く。理屈だけでなく、事業としての儲ける実績を見せなければ駄目なのだ。皆が食える生産の基盤を作り、それを皆に受け渡して行く。

農民の全てが農業経営者になれる資質を持っているわけではない。だからリーダーは突き進むのだ、崎枝さんたちと宝石に、そしてもう一つ価値ある加工品として売り出そうとしているのだ。

これは、沖縄と府県のことであると同時に、農業と他の産業、農村と都市の問題でもあるのだ。

ところで、残念ながら沖縄農業一般の生産技術レベルは低い。しかし、崎枝さんたちはこう考えている。

「今が劣っているというのなら、それこそが沖縄の可能性の大きさそのものなのだ」と。

（昆 吉則）